川崎市国際交流協会会長賞

言葉や文化の壁を越えて

旭町小学校　５年生　増田　彩織

ラロタヨは、「一緒にあそぼう」サラマットは、「ありがとう」これはフィリピンで英語と並んで公用語となっているタガログ語だ。

私が四年生のとき、私のクラスに転校生がやってきた。その子はフィリピンから来た子で、自己紹介のときから明るい子だなと思った。私はすぐに仲良くなりたくて、自己紹介が終わった後の休み時間にさっそく話しかけにいった。とりあえず英語であいさつと自分の名前を言ってみたら、その子はすこし困った顔をして、英語であいさつをしてくれた。その日私は家に帰り、チャットＧＰＴを使ってタガログ語を調べた。手紙を書けばきっと仲よくなれると思い、すぐにタガログ語で手紙を書いた。その子の趣味、好きなことを知りたいという思いを伝えたかった。次の日、その子からも手紙が返ってきた。手紙の最後には「友だちになろう！」と日本語で書いてあった。私が指でオッケーと作った瞬間、その子が私にハグしてきた。そんなことは初めてだったから、びっくりしてどう返したらいいのかわからなかった。うれしいような、不思議な感情だった。それ以来、その子は何か伝えたいことがあると私の服を引っ張り、タガログ語で話しかけてくる。困ってしまうときもあるが、必死に伝えてくれるので、なんとなく私にも伝わる。言葉はわからなくても、思いが伝わるとどんどん仲が深まっていくのだとわかった。五年生になり他のクラスになってしまったけれど、その子はいつも「さおりー」と言ってハイタッチをしてきてくれる元気で明るい私の友だちだ。

私が三年生のとき姉の中学校を通して、私の家にホームステイをしに十六さいの女の子がやってきた。金色のかみの毛がくるくるしていて、目の色が青いその子は「ペスカトリアン」といって、肉を食べない食生活を送る人だった。私の家族の大好物のぎょうざパーティーをしようと計画していた母は、それを聞いてあわてていたけれど、ペスカトリアンは魚介類なら食べられるというので、急きょたこ焼きパーティーをして楽しんだ。その子はたこ焼きを作るのも食べるのも生まれて初めてだと言っていてびっくりしたのをおぼえている。その後、お互いの好きなことを話したり、マジックやゲームをした。中でもトランプの「ババぬき」がすごく楽しくて、大声で笑いあった。言葉や文化がちがっても、こんなにもすぐに仲よくなれるんだと思った。横浜の中か街を散歩したり、その子が一番好きなジブリのえい画を一緒に見たり、ラゾーナ川崎のジブリのお店で買い物をしたり、私の飼っている犬の病院に一緒に行ったりもした。ホー

ムステイはたったの三日間だったけれど、家族のように過ごしたからお別れのときはとてもさびしかった。その子からもらったイギリスのコインは私の大切な宝物だ。

言葉や文化が違ってもすぐに仲よくなれる。そのような経験を通して、私は自分が住む街について少し見方を変えてみた。川崎市にはいろいろな人がいる。インターネットで調べてみると、川崎市には約五万人を超える外国人住民がくらしていて、全国でも外国人が多い自治体の一つだと分かった。私は川崎市には外国人は少ないと思いこんでいたが、こんなにも外国人住民がいるとわかり、すごくおどろいた。そう言われて考えてみると、たしかに、お母さんやお父さんが外国人であるという友だちが私の周りにはたくさんいるように思う。でも小さいころからそれがあたり前だったから、それを特別に思ったことはなかった。

いろいろな人というのは、外国人だけではい。いろいろな人にはきっと私も入っている。私はＡＢ型の左利きだ。みんなはそれをめずらしいというが、私はそうは思わない。タガログ語を話す友だち、お肉を食べないイギリスの女の子、そしてＡＢ型で左利きの私。年齢、性別、出身、文化、言語、性格…。だれひとり同じ人はいなくて、それがあたり前だ。

私のしょう来の夢は保育士になることだ。フィリピンの友だちやイギリスのりゅう学生と、言葉や文化の壁を越えてお互いに心が通じ合ったように、これからの子どもたちにも、違いをあたり前に受けいれ、心が通じ合える楽しさを伝えたい。これまで出会った人たちのおかげで私はこの夢を持つことができたと思う。言葉や文化が違っても相手を知ろうとする心があればつながれる。「好きですかわさき愛の街」という川崎の歌にも入っているけれど、「みんなで生きている街」、多様な人が生きる川崎で、違いをみとめ合える子どもたちを育てる保育士になりたい。保育士になるのはきっと大変だけど、生まれ育った街川崎で、未来に進んでいく自分にワクワクする。